

ユーモア感情の個人差に個人の性格・ユーモアへの態度が与える影響について

佐久間 千紗子

ギャグやジョーク、漫才などの滑稽な表現(以下ユーモア表現)を見聞きした時に生じる笑いや、面白いという感情(以下ユーモア感情)には、免疫機能の向上やストレスの緩和など身体的・精神的な健康効果があることが明らかにされている。見聞きしたユーモア表現が同じでも個人によってユーモア感情を感じる程度に違いがあることや人によってユーモア感情を感じやすいユーモア表現が異なること、つまり「笑いのツボ」が異なる。健康効果を目的としてユーモア感情を引き出すためにこの個人差を考慮し、個人に合ったユーモア表現を提供できればより確実に効果が得られると考えられる。

本研究では、ユーモア感情の個人差の要因は個人の性格やユーモア表現への態度の違いであるという仮説を明らかにすることを目的とした。調査には「ユーモアの好悪」、「ユーモアの表出」、「ユーモアのコーピング利用」、「ユーモアへの気づき」からなる既存のユーモア測定尺度と、外向性、協調性、良識性、情緒不安定性、知的好奇心の5つの性格傾向を調べる主要5因子性格検査を使用した。ユーモア感情の測定は「攻撃的ユーモア」、「遊戯的ユーモア」、「自虐的ユーモア」、「不幸な状況を含むユーモア」という独自の4分類に従って書籍から選出した16のジョークを読んでもらい、被験者がユーモア感情を感じた程度を答えてもらう形式とした。またジョークの内容を理解できたことを確認するために、ジョークの解釈について確認する質問を設けた。

アンケートは48名が回答し、そのうち有効回答は40名であった。ジョークのカテゴリーの妥当性を検証するためジョーク同士の相関を求めたところ、当初のカテゴリー内でジョークに対する反応の傾向にばらつきが見られたため、16のジョークひとつひとつに対する反応を従属変数、性格傾向、ユーモア表現への態度を説明変数とする回帰分析を行った。その結果、16のジョークのうち2つについてしか回帰式に有意性が見られなかった。そのうち1つは優位水準0.5%でもう一つは優位水準0.1%で優位であった。この2つのジョークはともに協調性、誠実性に優位な影響を受けていた。この2つのジョークはともに登場人物が自分の失敗を自虐的かつ楽観的に語るという共通の内容があるため、ともに同じ性格傾向からの影響を受けたと考えられる。この結果から、性格とユーモア表現への態度がユーモア表現全般についての反応の個人差の要因であるとは示せないが、一部のユーモア表現については性格からの影響を受けることが分かった。

(指導教員 中山 伸一)